多事奏論

編集委員
高橋 純子

「のど自慢」に鐘三つ 夫さんと この国の「主人」

A2221

「国民のみなさん」が激烈に不足している岸田文雄首相に日々唖然&慄然としているから余計に気になった。サッカー日本代表の森保一監督はなぜ「国民のみなさん」と呼びかけるのだろう？　「応援してくれたみなさん」「サッカーファンのみなさん」が妥当で、言ってもせいぜい「日本のみなさん」では――と、細かい言葉遣いに反応するのは私の悪い癖。今月11日の昼下がりにはテレビの前で快哉を叫んでいた。

「夫さん」に鐘三つ!!!

NHKのど自慢。もうすぐ結婚34年、夫に贈ると歌唱した女性に対して、司会の小田切千アナウンサーが「優しい夫さんは……」と語りかけたのである。今年結婚したばかりという女性には「でもパートナーと一緒に暮らせてないんですよね？」とも。

熱心な視聴者だった父親の影響で、在宅時はついチャンネルを合わせてしまうのだが、たぶん最近まで「ご主人」が使われていた、はずだ。「ご主人は会場に来てる？」「ご主人が好きな歌だったんですよね」。それを聞くたび私は「うーん」と眉間に縦じわを寄せていたのである。

他人の夫を何と呼ぶか問題。

「言葉狩り」をするつもりは毛頭ないし、特にご年配の方には「ご主人」以外の選択肢がなかったことは十分理解するけれど、けれど。「精選版　日本国語大辞典」で「主人」を引くと、①家のぬし。あるじ②他人を従属または隷属させている者。他人を使用している者。領主、首領、雇い主など。だんな。しゅう③妻が他人に対して自分の夫をさしていう④一寺一山の棟梁、または寺主⑤客をもてなす立場にいる人――とある。うーん。

私は「夫さん」、あるいは「パートナー」を推奨し、実践する者である。でもなかなか広まらないんだな、これが。過日、外国出身者に日本語を教えている方から「私自身は抵抗があるが、『ご主人』と教えざるを得ない。礼を失するリスクを生徒に負わせるわけにはいかない」と聞き、世間の高い壁に深いため息をついた。

だから、のど自慢なのだ。

ラジオを含めれば1946年から続く長寿番組、全国津々浦々をまわり、出場者は家族を思い、ふるさとを愛し、友を励ますために歌う。歌う。「理想の世間」が演出され、とことん漂白された非政治的な場所で、「夫さん」への転換がはかられることの意味は大きいと思うわけである。

しっくりくる言葉を使う。使ってもらう。それは自分が、自らの人生の「主人公」となるために必要な第一歩だ。

私が呼称にこだわるのは、政治部の先輩たちに「政治家を先生と呼ぶべからず」をたたき込まれたことが大きい。呼称はいわば「筋トレ」だ。「○○さん」と呼ぶことで、政治家と対峙する「体幹」が、知らず知らず鍛えられたと実感する。

先月鬼籍に入られた大先輩、元朝日新聞編集委員の早野透さんには一度だけ自分から話しかけたことがある。2002年10月22日付朝刊、早野さんはコラム「ポリティカにっぽん」で、男女共同参画へのバックラッシュ（反動）を朝日新聞で初めて大々的に取り上げた。いま旧統一教会との関係で光が当たっているが、メディアの腰は当時から総じて引けていて、「抗議とか大丈夫ですか？」と聞くと、「でもこれは、コラムを持ってる人間の役割だからね」。

一般記事では書きにくいことも自分なら、コラムでなら書けるという自負。抗議やバッシングは引き受けるという覚悟。大きな顔と背中を思いだし、きつくふんどしを締め直す。戦時中さながら、説明も説得もないまま政策が大転換され、国民の責任であるぞと増税を一方的に押しつけられる年の瀬、この国の「主人」は私たちひとりひとりなのだという自覚を取り戻したい。

来年もよろしくお願い申し上げます。

朝日 2022年12月21日